

サンディエゴ日本人コミュニティー  
ひなまつりイベント

X

プロフェッショナル日本語  
2018冬学期



2018年3月3日 (土)

## グループ1「イクメンを育てる／支える」



### メンバー紹介

名前	阪本佳音	ステファニー・デニス	バネッサ・ゲラ	ビンルイ・チェン
学年	4年生	5年生	4年生	4年生
専攻	数学	日本学	日本学	日本学

### グループの研究トピック

私達の選んだ社会問題の研究トピックは男女差別です。そして、「イクメン」はこの社会問題に関して、どのようにしてサンディエゴに住んでいる対象者の意識を高めるかを考えていました。

### 社会問題の説明

私達のプロジェクトは日本の男女差別の問題を元にしました。特に社会での男女の役割にフォーカスしました。UCSDの学生にとって男女差別というと女性への不平等しか考えないかもしれませんが、実は男性にとっても不平等なことがあります。それで、私たちのプロジェクトは、男性の不利な点に目を向けてみました。

日本の家庭での子育ての役割分担は非常に平等ではないそうです。つまり、子育ての負担は女性の負担になります。ところが、日本人の男性は子育てしたくないわけではありません。Childresearch.netによると、50%以上の父親が子供の育児を参加したいらしいです。それを叶えるために、日本の厚生労働省は「イクメン」というプロジェクトを始め、男性も子育てすることもできるというメッセージを広げています。私たちはそのメッセージを聞いた時、私たちもそのような大切なメッセージを広げていって、サンディエゴでも日本人の人たちにイクメンという概念を教えたいと思いました。

### プロジェクトアイデア

UCSDの日本人の学生と日本語が通じる人を対象者にして、育児への意識を高めることを目標にするプロジェクトを計画しています。活動内容は、まず、イクメンと男女差別

問題の関係性とイクメンに対しての政府活動を紹介するスライド発表です。そして、サンディエゴでのサポートグループとボランティア活動も紹介したいと思っています。最後は、雰囲気を作るために、イクメンに関するゲームをするつもりです。

ゴールと目的：私たちの目的日本でイクメンが多くなっていくは日本学生と留学生にイクメンのことを教え、その学生に自分はイクメンに向いているかいないかどうか気づいてもらいたいです。アメリカに住んでいる日本人にイクメンになるのはどんなことか、なぜ自分にも家族にもいい影響を与えることができるかを知らせたい。

## ボランティア活動報告

### 冬学期に行ったボランティアの内容

私たちはサンディエゴのくじら幼稚園へ行き、ボランティア活動をしました。バネッサさんは年少のクラス（3~4歳）を担当して、そのクラスで、子供は節分の文化を勉強したり、ひらがなの歌を歌ったりしました。阪本さんは年中のクラス（4~5歳）を担当して、ひな祭りとひらがなの勉強を手伝いました。そしてビンルイさんは年長のクラス（5歳と以上）を担当して、子供にひらがなの書き方と鬼の折り紙の作り方を教えました。子供の世話をすることと、子供と話すことは難しかったですが、この経験からいろいろ学びました。子供は皆違いますから、子供に物事を教える時、工夫して、柔軟な対応をしたら、子供は楽しがって話を聞いてくれます。

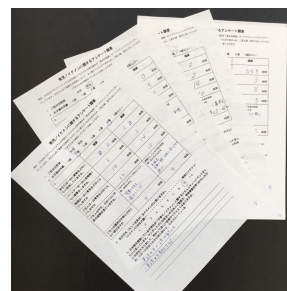
## ひなまつりイベントでの活動報告

### 1) 受付

イベント会場の受付役をしました。受付は主催者の為にサインアップシートを作り、イベントの参加者に自分の名前、連絡先、住んでいる地域、大人と子供の人数を記入し、イベント後に主催者に渡しました。記入後、グループ用にイクメンや育児のアンケートをお願いしました。ご協力してくださった方にはひなあられとぬいぐるみをプレゼントしました。受付をしたメンバーは敬語、謙譲語、尊敬語に注意しながら参加者に話しました。

❀ひなまつりへようこそ❀				
	名前 (代表者のみ)	連絡先 (メールアドレス)	住んでいる地域	大人の数・子供の数
1				
2				
3				

サインアップシート



アンケート回収後

## 2) アンケート調査

まずは性別とお子様の年齢を聞き、その後自分とパートナーの理想と現実の時間に関する質問を聞きました：一日に家事をどのくらい担当しているか、一日育児をどのくらいしているか、平日と週末はどのくらい子供の面倒を見ているかなどを聞きました。そして、最後に夫の方はどれくらいイクメンだと思うかを聞いてから、私たち大学生が育児やイクメンをどのようにサポート出来るかを聞いてみました。

結果的にはアンケートをうけた人の中でほとんどみんなが夫はイクメンと答えました。意外と理想の時間と現実の時間の違いはほぼありませんでした。今後どのようなイベントを行うべきかの質問は日本語文化と英語のふれあいだと言う人が半々でした。

## 3) 写真

受付のスク립トを練習



お客様が来る前の準備



サインアップシートとひなあられ  
のお土産



一緒に写真を撮られる雛人形

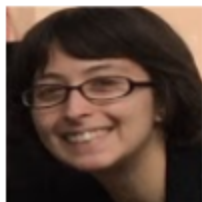


イベントのために、フェイスブックバーナーを作りました。

#### 4) イベントに参加した感想／学んだこと



ひな祭りのイベントでボランティアした後、日本人的な家族のことが少しずつわかるようになりました。そのような経験は記事から学べないので、そのようなことは重要だと思います。(デニス)



このイベントでボランティアした後、私は日本人的な家族はそれぞれ違う生活水準があると理解しました。そして、アメリカに住んでいる日本人達にとって、ひな祭りイベントのように、日本の文化を祝うことは大事だと思います。でも、子供を育てる経験がないから、日本人の両親の状態がわかりません。この経験は学校から学べないことなので、難しいでしょう。(バネッサ)



子供と触れ合うというのは、遊ぶことだけではなく、適切な話す方と態度を探すのも重要だと、私は勉強になりました。学生の私でさえ感じられる子育ての難しさは親にとって勉強すべき課題でしょう。(ピンルイ)



クジラ学園でボランティアした時、日本人の幼稚園生に日本語を習うことだけではなく日本語文化も教えていたので、アメリカで日本人の子の育児は文化を知るのも大切なことだと習いました。(阪本)

## グループ2「リユース」



### メンバー紹介

名前	シャンリン・チェン	ヤンラン・リン	シー・キー
学年	1年生	2年生	2年生（大学院）
専攻	地球科学	会計	土木工学

### グループの研究トピック：リユース

社会問題の説明：環境問題は日米両国でとても深刻な社会問題です。例えば、カリフォルニアは毎年6百万のプラスチック、金属の容器を毎日使っています。しかし、カリフォルニアのリサイクル施設がどんどんつぶされている。サンディエゴではリサイクルが発達しているがリユースのことはあまり知られていない。米国と比べ、日本は環境問題についての処理方法が発達しています。そこで、米国の環境問題を改善するため、日本で発達しているリユース方法と日本の「もったいない」文化をサンディエゴに広めたいと思います。

### プロジェクトアイデア

サンディエゴに住んでいる人に無駄遣いをしない「もったいない」文化を伝えるために、セミナーを提案しました。このセミナーの対象者は日本語を習いたい人です。こうして参加者が日本の文化を理解する時に専門的な日本語を習うことができます。対象者が3Rという精神を実践するために、セミナーの後でリユースに関してワークショップをするつもりです。

### ゴールと目的

私たちの課題は「工夫したリデュース」であり、日本だけではなく、多くの国で行われているエネルギーのリカバリーに応じて、正しくゴミを分類、処理、回収し、「リユース、リデュース、リサイクル」の概念を貫き、環境を守ることです。このプロジェクトの目標は、多くの人に環境を守る重要性を意識させることです。その目的は、日本の「もったいない」文化をアメリカで広めることです。

# ボランティア活動報告

## 冬学期に行ったボランティアの内容

私達のリユースチームは前週土曜日Lakeside's River Parkでボランティアをしました。とても楽しかったです。ボランティア活動のセットアップについても勉強になりました。会場で参加者がsign inできるテントがありました。参加者のためにイベント主催者は手袋のような道具を準備しました。参加者はwaiver formにサインする必要もあります。ゴミを拾うとき、車のバンパーも見つけました。



ボランティア活動

## ひなまつりイベントで行ったこと

### 1) 会場デコレーション

会場のデコレーションについて、私達は不要な段ボールとペーパーをリユーズして、大きな雛人形を作りました。そして、段ボールを使って、「クラフト」のサインも作りました。

### 2) クラフト

子供向けのクラフト会を提案する時、雛祭りのテーマとリユースを繋げるために、私達はトイレットペーパーの芯で雛人形を作ること考えました。小さい子供は自分で雛人形を作れないので、私達が雛人形の頭と体を作っておいて、子供が自分たちで顔を書き、頭と体を繋げられるようにしました。また、雛人形の折り紙も用意しました。

### 3) 写真

大きな雛人形の写真



イベントの当日



雛人形の写真



完成した雛人形

### 4) イベントに参加した感想／学んだこと



不要な材料を使って作った可愛い雛人形で、子供達を喜ばせることができ、とても楽しかったです。JAPN135Bクラスを通して、環境問題が米国社会に巨大な影響を与えていることを深く考えました。今後も社会の一員として、環境問題の改善に貢献したいと思います。(ヤンラン)



皆様は私達が作った雛人形を気に入ってくれて、幸せです。今学期のディスカッションと雛祭りのイベントを通して、グループメンバーたちのコミュニケーションが最も重要なことだとわかりました。(シャンリン)

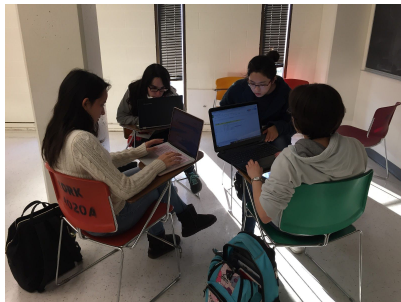


子供たちは嬉しそうに見えたため、ワークショップは成功したと言えると思いますが、参加者に環境問題を意識させ、再利用できる材料を生かし、今後もリデュースやリサイクルをさせることはとても難しいことだと思います。プロジェクトの目的を遂行するために、コミュニケーションや参加者に活動をする意義を感じさせるのは大事だと思いました。(キー)



## 編集後記

### クラスの様子



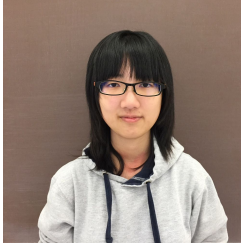
## English Summary

JAPN135B is the subsequent class of JAPN135A in the JAPN135 series. Different from the other Japanese language courses that focus more on the academic learning of the Japanese language, the JAPN135 series promotes the learning of the Japanese language through driving the students to research the current social issues in the Japanese/American societies and proposing solutions to solve the issues.

In 2018 Winter Quarter, we, the JAPN135B class, targeted the current contentious environmental and gender discrimination issues in the Japanese/American societies. We brainstormed and suggested related proposals to alleviate the environmental and gender discrimination issues in the San Diego community. The class were divided into the “reuse” team that focuses on the environmental issues and “Ikumen” team that focuses on the gender discrimination issues.

As an attempt to gain experiences for the implementation of the proposal in the future, we participated in the local Hinamatsuri event on March 3rd. During the event, the “reuse” team made Hinamatsuri dolls by reusing materials such as papers, core of toilet paper...etc. The “Ikumen” team made detailed surveys that learned information about the situation of child care of the attended families.

## ボランティア



名前：シャオジュン・レイ

今回135シリーズの2年目の参加です。私は環境保護とクラフトが好きなのでリユースチームに参加しました。クラフトとイクメンを組み合わせるのはとても独特だと思いました。来学期も対象者にとって面白いイベントを作れたらいいなと思います。



名前：榎 佑果

今回初めてこのクラスに参加させていただきました。クラスの皆さんが日本の社会問題に詳しく、真摯に向き合ってくれていて、とても驚かされました。イベント当日も、先生をはじめ、皆さんで力を合わせて、日本人の大人や子供たちと触れ合っている姿が素敵でした。

## 講師



名前：武田泉

初めは「男女の社会的役割」と「リサイクル」という大きなテーマでリサーチをしていた学生たちですが、日本人コミュニティーのイベントに参加させてもらったことで、コラボレーションの楽しさや難しさ、また参加者のニーズを考えることの大切さに気がつけたと思います。春学期も「人の役に立つ」ようなプロジェクトを作ってほしいです。